

『古今和歌六帖』 出典未詳歌注釈稿

—— 第六帖 (15) 檀 榎 紅梅 ——

福田 智子

本稿は、『古今和歌六帖』出典未詳歌注釈稿―第六帖(9) 芹 青葛―(『社会科学』第四十三巻第四号〈通巻一〇一号〉、二〇一四年二月)、『古今和歌六帖』出典未詳歌注釈稿―第六帖(10) 朝顔 葵―(『社会科学』第四十四巻第四号〈通巻一〇五号〉、二〇一五年二月)、『古今和歌六帖』出典未詳歌注釈稿―第六帖(11) 酢漿草 苔―(『社会科学』第四十五巻第一・二号〈通巻一〇六号〉、二〇一五年八月)、『古今和歌六帖』出典未詳歌注釈稿―第六帖(12) 蟬 鈴虫―(『文化情報学』第十一巻第一号〈通巻一四号〉、二〇一五年一月)、『古今和歌六帖』出典未詳歌注釈稿―第六帖(13) 螢 蝶―(『社会科学』第四十七巻第一号〈通巻一二三号〉、『古今和歌六帖』出典未詳歌注釈稿―第六帖(14) 木 紅葉―(『文化情報学』第十二巻第二号〈通巻一七号〉、二〇一七年三月)の続編として、『古今和歌六帖』第六帖の「檀」から「紅梅」までの題に配されている出典未詳歌、九首について注釈を施し、表現のあり方を考察したものである。これまで同様、底本には書陵部蔵桂宮本(『新編国歌大観』の底本)を用い、江戸期の流布本である寛文九年(一六六九)版本を含めた九本の伝本の本文異同を視野に入れる。凡例は、『社会科学』第四十三巻第四号に詳述しているので、その概略を記すにとどめる。なお、巻末には、別出一覧を示す。前稿の最

後に挙げた紅葉題の歌(四〇九一番まで)に続く柞題の歌(四〇九二 四〇九五番。出典未詳歌なし)から、檀 榎 紅梅題の歌(四〇九六 四一五四番)を対象とする。これについての凡例も、前稿を参照されたい。

凡例

- 一、底本は、宮内庁書陵部蔵桂宮本を用いる。
- 二、校異は、漢字・仮名の表記の違いや仮名遣いの相違は原則として示さず、語の異なりのみを示すが、和歌の解釈上、重要と思われる表記の異同は、必要に応じて適宜示す。諸本とその略称は次のとおり。
- 永青文庫蔵北岡文庫本 略称(永)
- 鳥原図書館蔵肥前嶋原松平文庫本 略称(松)
- 内閣文庫蔵和学講談所旧蔵本 略称(和)
- 内閣文庫蔵林羅山旧蔵本 略称(羅)

○神宮文庫蔵林崎文庫旧蔵本

略称(林)

○神宮文庫蔵宮崎文庫旧蔵本

略称(宮)

○田林義信氏旧蔵本

略称(田)

○ノートルダム清心女子大学図書館蔵黒川本

略称(黒)

○寛文九年版本

略称(寛)

三、和歌の引用は、とくに断らない限り、『新編国歌大観』に拠る。

注釈

四〇九六(まゆみ)

【本文】

うつろふもうれしかりけり我がためにふかきまゆみの色をみすれば

【校異】なし

【語釈】○うつろふ 変化する。変わっていく。下句の意から溯つて解すると、紅葉する意。「神な月時雨もいまだふらなくにかねてうつろふ神なびのもり」(古今集・秋下・二五三・よみ人しらず・題しらず)。○我がために 私のために。「我」(詠者)が、下句に述べられる恩恵を受ける関係にあることを示す。○ふかきまゆみの色 檀の紅葉の濃く美しい色。「まゆみ」(檀)

は、ニシキギ科の落葉樹。弓を作る材料とされたことからくる名。

【通釈】 変わっていくというのも、うれしいことだなあ。私のために、濃く美しい檀の色を見せるので。

【他出】なし

【考察】

檀が深紅に紅葉していくのを愛でることができるところから、「うつろふ」(変わっていく)というのもうれしいものだと言んだ歌である。

「うつろふ」という語は、「秋風に山のはのうつろへば人の心もいかごとぞ思ふ」(古今集・恋四・七一四・素性法師・題しらず)という例のように、木々の紅葉と人の心の変化を重ねて用いられることが多い。和歌では通常、心が「うつろふ」とは心変わりを意味し、嘆きにつながる。当該歌においては、「うつろふもうれしかりけり」という、一見、意外な認識を初句・第二句で示し、第三句以下で、その理由を述べるという構造になっている。あるいは、「物ごとに秋ぞかなしきもみちつつうつろひゆくをかぎりと思へば」(古今集・秋上・一八七・よみ人しらず・題しらず)を念頭に置いての詠か。

檀の紅葉を詠んだごく初期の例としては、『坊城右大臣殿歌合』(天曆十年(九五六))「この秋のまゆみのもみちいかなれば

そめぬにいろのふかくみゆらん」(一三・なかとほ・左 まゆみ)、「いろにいでてまだみえぬまはおほつかないまやまゆみのもみちするとき」(一四・宮内君・右)の二首の歌が挙げられる。その後は、『宰相中将君達春秋歌合』(応和三年(九六三))にも、「いろふかきまゆみはあきのかたにこそたれもこころをいるるみゆかな」(九五・かははなれぬるあきなめりとあれば、御かへりをまゆみにつけて)、「もみちつつあきゆくかたのまゆみにはこころもいるとみるひとぞなき」(九六・春)という歌の応酬がある。いずれも十世紀半ば開催の歌合の歌である。なお、「しぐれをばまちもついでや山のはのまゆみのもみちまだきそむらん」(書陵部本中務集・一八二・あきはまだしきころ、まゆみのもみちをみて、むまごの大納言君)という歌からは、檀が秋の早い頃から紅葉する様子が窺える。

「我がため(に)」の先行例としては、『万葉集』の「夏影のつま屋の下に衣裁つ我妹裏設けて我(あ)がため裁たばやや大きに裁て」(巻七・二二八二・二二七八)、「我(あ)がためと織女のそのやどに織る白たへは織りてけむかも」(巻十・二〇三一・二〇二七)という例が挙げられる。だが、平安期に入ると、「わがためにくる秋にしもあらなくにむしのねきけばまづぞかなしき」(古今集・秋上・一八六・よみ人しらず・題しらず)といった歌はあるが、「語釈」で述べたような「我」が恩恵を受ける意

で用いられる例は見出しにくいようである。

「色(を) 見す」という表現は、「花のいろのこきをみすとてこきたるをおろかに人はおもふらんやぞ」(伊勢集・四六五・かにひの花につけて)、「おもひいでとふにはあらじあきはつるいろのかぎりをみするなりけり」(元良親王集・一一五・山の井のきみのいへのまへをおはすとて、かへでのもみちのいとこきをいれたまへりければ)、「ひと夜のみねてしかへらば藤の花心とけたる色見せんやは」(後撰集・春下・一二九・兼輔朝臣・ことふえなどしてあそび、物がたりなどし侍りけるほどに、夜ふけにければまかりとまりて)などがある。花や紅葉の「色」に人の心の「色」を重ねる場合が散見される。あるいは当該歌でも、「ふかきまゆみの色」に、人の心の深い思いの寓意があるか。

四〇九七(まゆみ)

【本文】

つらゆき

ひきふせてみれどあかぬはくれなるにぬれるまゆみのもみち(成)なりけり

【校異】なし

【語釈】〇ひきふせて 引き寄せて。檀の枝は、しなり、たわむので、自分の方に引き寄せることができる。「弓」が「引き」「伏す」ものであることから「檀(真弓)」の縁語。〇ぬれる 五

段活用の動詞「塗る」に完了の助動詞「り」が付いたもの。

【通釈】引き寄せて見ても飽きないものは、鮮明な赤色に塗った檀の紅葉だったのだ。

【他出】なし

【考察】

紅色に塗ったように見える檀の紅葉は、手元に引き寄せて見ても飽きることのない美しさだと愛でた歌である。和歌では、檀の白木で作った丸木弓「白真弓」が詠まれることも多いが、当該歌では、これとは対照的に、檀の紅葉に着目して「紅に塗れる」と表現したのであろう。

「引き伏す」という語が和歌に詠まれた他例は、未だ管見に入らない。ただし、「あづさゆみおもはずにしていりにしをさもねたくひきとどめてぞふすべかりける」(拾遺集・雑下・五六八・源かげあきら・女のもとにまかりたりけるに、とくいりにければ、あしたに)という歌にも見られるように、「引く」「伏す」は「弓」の縁語として用いられる。当該歌の「引き伏す」は、「檀(真弓)」の縁語として敢えて用いられたものであろう。

「みれどあかぬ」という表現は、「家に見れども飽かぬを草枕旅にも妻とあるがともしさ」(万葉集・巻四・六三三・六三四・娘子報贈歌二首)、「かはづ鳴く六田の川の川柳のねもころ見れど飽かぬ川かも」(万葉集・巻九・一七二七・一七二三・絹の歌一

首)、「秋田刈る飯廬の宿りにほふまで咲ける秋萩見れど飽かぬかも」(万葉集・巻十・二一〇四・二一〇〇)など、『万葉集』に集中して見られる。勅撰集においては、「春さればのべにまづさく見れどあかぬ花まひなしにただなるべき花のななれや」(古今集・雑体・一〇〇八・よみ人しらず・返し)が初出で、『後撰集』の一首(秋中・二九五)は、前掲『万葉集』巻十の歌の再録である。その他、『拾遺集』に三首(うち一首は長歌)見られるが、「見れどあかぬ花のさかりに帰る雁猶ふるさとのはるやこひしき」(拾遺集・春・五五・よみ人しらず・題しらず)以外の二首(五六九・五七〇)は、『万葉集』(巻一、三六・三七番)の再録。その後、八代集に用例は見られず、後の『風雅集』に二例を見出すのみだが、これらの風雅集歌も、万葉歌の再録(春中・一〇六番は『万葉集』巻十・一八五六(一八五二)番、雑下・二〇一七番は、『万葉集』巻十二・三一九九(三二八五)番)である。また平安期の私家集の例も、「人もみな我もまちこし桜花人人立ちてみれどあかなくに」(貫之集・二八五・延喜の末よりこなた延長七年よりあなた、うちうちの仰にてたてまつれる御屏風の歌廿七首 春)、「いせのうみにしほやくあまのふぢごろもなるとはみれどあかぬきみかな」(御所本躬恒集・三二八・おなじところのみわたりける女に)は見出せるが極めて少ない。『万葉集』の後には、新たな詠歌に用いられにくかったようであ

る。

「まゆみ」の「もみぢ」については四〇九六番〔考察〕に譲るが、「まゆみ」と「くれなゐ」の組み合わせは意外と見つからない。また、動詞「ぬる」（塗る）の用例も、「香塗れる塔にな寄りそ川隈の屎鮒食めるいたき女奴」（万葉集・卷十六・三八五〇・三二八・香・塔・厠・屎・鮒・奴を詠む歌）、「山里のかきほにさける卯の花はわかぬれる心地こそすれ」（夜の鶴・一・ある人）といった例はあるものの、和歌の例はきわめて稀少である。当該歌は、「檀」（真弓）から「弓」を連想し、弓を朱や赤漆などで赤く「塗る」ことから、檀の紅葉を、人手によつて赤く塗ったものと見立てたのであろう。

四〇九九（かへで）

【本文】

（そせい）

今さらに心はかへでよはへんといひしことばにあざむかれつつ

【校異】○心はかへて―心かえて（林） ○よはへん―はへんよせ（宮）

【語釈】○今さらに 今またさらに。結句「あざむかれつつ」に掛かる。 ○心はかへで 心変わりしないで。「変へで」に「楓（かへで）」を物名として詠み込む。 ○よはへん この世は生きていこう。年月は過ごそう。

【通釈】今またさらに、「あなたを思う気持ちを変えることなくこの世は生きていこう」と言った（あなたの）ことばに騙されながら（私は生きているよ）。

【他出】なし

【考察】

歌題の「かへで」を第二句に隠し、心変わりほしないという恋人の言葉に騙されながら生きる女性の立場で詠んだ歌であろう。その内容は、「いつはりと思ふものから今さらにたがまことをか我はたのみむ」（古今集・恋四・七一三・よみ人しらず・題しらず）に通じていよう。

「かへで」は、「……かへでのもみぢにかきつけ侍りける」（後撰集・哀傷・一四一三・戒仙法師）、「人のかへりごとせざりければ、かへでををりて、……」（伊勢集・三六二）、「山の井のきみのいへのまへをおはすとて、かへでのもみぢのいとこきをいれたまへりければ」（元良親王集・一一五）、「……おほんかへりにかへでのほにつけて」（斎宮女御集・一一六）というように、贈答歌の具のひとつであった。「あきくともみどりのかへであらませばちらずぞあらましもみぢならねど」（是貞親王家歌合・六五）という歌のように、楓そのものを詠むこともあるが、当該歌や、次に取り上げる『古今六帖』四一〇〇番、さらには、「はるがすみたちそめしよりいろかへてのはならしてきわかな

つむべく」(近江御息所歌合・一四・かへで)、「このみゆきちとせかへでも見てしかなかる山ぶし時にあふべく」(後撰集・雜一・二〇九二・素性法師・法皇てらめぐりしたまひけるみちにて、かへでのえだををりて)、「おもふよりこだかき松の葉にしあらばちよもかへでとともにこそ見め」(中務集・一四九・五月に、人のもてきたる松を、かへでの木のもとにうゑて)のように、「変へて」(変へで)と重ねて詠まれる例が散見される。

「あざむかる」という表現には、「ひとしれずまつにねられぬ晨明の月にさへこそあざむかれけれ」(後撰集・恋六・二〇三二・元良のみこのみそかにすみ侍りける、今こむとたのめてこずなりにければ 兵衛)、「うぐひすはあざむかるらんしら雪のはなとみゆまでえだにふれば」(興風集・五三二)、「むしにだにあざむかれじとおもふ身をいかなるあゆのかはるなるらん」(為頼集・三九・正月ついたちごろ、ある人の御もとに、せんえう殿より、あゆのかたをつくりてありければ)などの例がある。「月」や「白雪」、「虫」など、人ではなく自然物について用いた例が目に付く。

四一〇〇(かへで)

【本文】

よし野山きしのもみぢし心あらばまれのみゆきを色かへでまで

(ただふさ)

【校異】〇きし—峯(林)嶺(田)

【語釈】〇きし 山の切り立ったところ。がけ。断崖。「あしひきの山かも高さ巻向の崖の小松にみ雪降り来る」(万葉集・巻十二・三二七・三三三)。〇まれのみゆき ごく少ない行幸の機会。「みゆき」(行幸)は、とくに天皇の外出をいう。〇色かへでまで (美しい)紅葉の色を変えずに待て。「楓(かへで)」を物名として詠み込む。

【通釈】吉野山のがけの紅葉は、もし心があるならば、稀にある行幸を、美しい色を変えずに待っていておくれ。

【他出】

『夫木抄』巻第十五秋部六、六二七七番

(紅葉)

行幸、六二

同(読人しらず)

吉野川きしのもみぢし心あらばまれのみゆきをいろかへで
まで

『歌枕名寄』巻第七吉野篇、一九九四番

同(六帖) 紅葉

忠房

みよしのの木木のもみぢし心あらばまれのみゆきをいろかへで
みよ

【考察】

吉野山の紅葉に対し、めったにない天皇の行幸を、盛りのま

ま待っていてほしいと呼び掛けた歌である。

当該歌について、『校證古今和歌六帖』（石塚龍磨稿、田林義信編、有精堂、昭和五十九年四月）は、契沖『拾遺六帖』を引き、次のように述べる。

拾遺六帖云、寛平法皇宮瀧御覧におはしましける時よまれる歟。貫之、いつみの守なりし時、やまとよりまうてきて歌よまれたる人なれば、此時、大和守あるひは介なとにてよまれけるか。貞信公の歌に似たり。後撰に素性も此度の御供にかへてを折てよまれたる歌あり。そのついでなとの歌にや。（句読点筆者）

「寛平法皇宮瀧御覧におはしましける時」というのは、昌泰元年（八九八）十月、宇多上皇の吉野「宮瀧」行幸を指す。当該歌が藤原忠房によってこの時に詠まれた可能性を指摘しているのである。そして、『古今集』の忠房歌（雑上・九一四）の詞書、「貫之がいづみのくにに侍りける時に、やまとよりこえまうてきてよみてつかはしける」から、忠房は大和守か介だったのでないかという。ひとつの可能性として傾聴すべきであろう。

また、当該歌が、『百人一首』貞信公の歌としても知られる藤原忠平（八八〇～九四九）の歌、「小倉山峯のみみぢば心あらば今ひとたびのみゆきまたなん」（拾遺集・雑秋・一一二八・小一条太政大臣・亭子院大井河に御幸ありて、行幸もありぬべき所

なりとおほせたまふに、ことのよしそうせんと申して）に似ることを指摘する。紅葉に対して行幸を待つことを求めるという趣向とともに、腰句「心あらば」が共通しており、表現の型を見出すことができる。

最後に指摘されているのは、前述の宇多上皇の行幸の際に素性が詠んだ、「このみゆきちとせかへでも見てしかなかる山ぶし時にあふべく」（後撰集・雑一・一〇九二・素性法師・法皇てらめぐりしたまひけるみちにて、かへでのえだををりて）である。当該歌と同じく「かへで（楓）」を物名として詠み込んでおり、その共通性を考慮するとき、当該歌がこの時に詠まれた蓋然性をさらに高める根拠のひとつとなろう。

四一一五（かへ）

【本文】

松かへまのときはににべきこころころかはみだれてこひんあやなかりけり

【校異】○ときはににへきーときはに、へ（林）○みたれてこひんーみたれん戀も（黒・寛）○あやなかりけりーあやなかりけり（羅）

【語釈】○松かへ 松と柏。常緑で樹齢の長い木の代表。漢詩文の修辭に由来する。○ときは 常緑樹の葉が、一年を通して

その色を変えないさま。○みだれてこひん 心の平静を失って恋い慕おうとすること。○あやなかりけり「あやなし」は、そうする理由や根拠がない、いわれがないの意。

【通釈】松や柏の常緑に似通うような、常に変わらない心であるうか、いや、そんなことはない。平常心を失って恋い慕おうとするのに、理由などありはしないのだなあ。

【他出】なし

【考察】

不変の松や柏とは異なり、人の心は恋をすることによって激しく揺れ動くが、それを理屈で説明することはできない。あれこれと思ひ煩う恋心は仕方のないものだという歌である。

「松かへ」は、つとに『万葉集』に「……奈呉の海人の 潜き取るといふ 白玉の 見が欲し御面 直向かひ 見む時まで 松栢の 栄えいまさね 貴き我が君」(万葉集・巻十九・四一九三・四一六九・家婦が京に在す尊母に贈らむ為に詠へられて作る歌一首)と見えるが、「松かへ」で「栄え」に付く枕詞である。平安期には、「……たれもみな おなじみやまの 松栢と ちよもちよもや つかへむと……」(能宣集・四四七・源順つかさえたまはらでよをうらみて、朝忠の中納言の許になが歌よみてたてまたしたりけるを、聞き侍りて、人人あはれがり、歌よみなどしはべりしかば、心ひとつに和し侍りてよみはべりし)

といった歌が見えるが、用例は稀少である。

「みだれて」「恋ふ」という表現は、『万葉集』に集中して見られ、「ぬばたまの我が黒髪を引きぬらし乱れてなほも恋ひ渡るかも」(巻十一・二六一・五二二六・一〇)、「草枕旅にし居れば刈り薦の乱れて妹に恋ひぬ日はなし」(巻十二・三一九〇・三二七六)などの例がある。また、勅撰集においては、『古今集』に「かりこもの思ひみだれて我こふといもしるらめや人しつげずは」(恋一・四八五・読人しらず・題しらず)、「おきへにもよらぬたまもの浪のうへにみだれてのみやこひ渡りなむ」(恋一・五三二・読人しらず・題しらず)の二首の歌を見出すが、『後撰集』『拾遺集』には例がない。いずれの用例も、「黒髪」や「刈り薦」「たまも」など、乱れた状態の比喻表現を伴っており、当該歌とは一線を画す。

なお、「みだれて」と「恋ふ」とを直結させた「みだれて恋ふ」の例として、早くは「片糸丹 貫玉之 緒緒弱美 素手恋者人哉知南」(新撰万葉集・上・二二三)、「おもふこといはまほり江におふる蘆のみだれてこふと人しるらめや」(御所本躬恒集・三四〇・ふかやぶがひとぎねぐして、だい三を冊首づつよみ侍りけるに、人しれぬ恋を)が挙げられるが、その後の用例は、前掲『新撰万葉集』歌を踏まえて詠まれた、「いつまでかみだれてこひむあふことなほかたいとにぬけるしらたま」(続古今集・

恋二・一〇五六・正三位知家・寄玉難恋といふことを、「しづくまき数にもあらぬ玉のをのみだれてこひん絶えははつとも」(壬二集・二八九六・恋歌あまたよみ侍りしに)をはじめ、わずかの例が見られるのみである。

四一二一(たけ)

【本文】

うきふしもあらじとぞおもふなよ竹のよをはかなしと思ひにしかば

【校異】 ○なよ竹―直竹(和)直竹(宮)くれ竹(黒)呉竹(版)

○よをはかなしと―よをは悲しと(黒・寛)

【語釈】 ○なよ竹の 枕詞。やわらかい竹の節の意。ここでは、

「節」の古語「よ」と同音の「世」に付く。「うきふし」(憂き節)は縁語。 ○はかなし あっけなくむなし、無常である。

世の中や人生についていう。 ○思ひにしかば 「にしか」は、完了の助動詞「ぬ」の連用形「に」に過去の助動詞「き」の已然形「しか」が付いたもの。自分の直接体験として、過去になった事柄や完了した事柄を表す。

【通釈】 (これからは) つらい時もあるまいと思う。世の中は無常であると思ってしまったので。

【他出】 なし

【考察】

「うきふし」「なよ竹の」「よ」という縁語を用いて、世の中の無常をすでに認識してしまったので、今後はもうつらさを感じることもあるまいという諦念を詠んだ歌である。

「うきふし」の語は、『万葉集』にはなく、勅撰集では『古今集』雑下に「今更になにおひいづらむ竹のこのうきふししげき世とはしらずや」(九五七・凡河内みつね・物思ひける時いときなきこを見てよめる)、「世にふれば事のはしげきくれ竹のうきふしごとくに鶯ぞなく」(九五八・よみ人しらず・題しらず)とある二首の歌が初出である。八代集においても、『新古今集』に一首(九七六・俊成)を見出すにとどまる。平安中期までの例としては、他に「鶯のたえず啼きつる青柳のいとにうきふしなくもあらなん」(貫之集・六九・延喜十七年八月宣旨によりて)「七夕のうきふしならでよをふるは年に一度あへばなりけり」(貫之集・四八五・同じ年三月うちの御屏風のれうの歌廿八首／七夕)「うきふしのひとよもみえばわれぞまつつゆよりさきにきえはかへらん」(元良親王集・四八)などの例があるが、多くはない。「なよ竹」の例は、『万葉集』に一例見出せるが、「……秋山のしたへる妹 なよ竹の とをよる児らは……」(巻二・二一七)とあるように、枕詞「なよ竹の」で「とをよる」に付く。勅撰集における初出は『古今集』で、「なよ竹のよながさうへにはつ

しものおきゐて物を思ふころかな」(雑下・九九三・ふぢはらのただふさ・寛平御時にもろこしのはう官にめされて侍りける時に、東宮のさぶらひにてをのこともさけたうべけるついでによみ侍りける)という歌があり、『後撰集』にも「なびく方有りけるものをなよ竹の世にへぬ物と思ひけるかな」(恋五・九〇六・よみ人しらず・女に物いふをとこふたりありけり、ひとり返事するとききて、いまひとりがつかはしける)の例がある。他に『拾遺集』に二首(一一六一・一三〇四)あるが、それぞれ元輔・兼盛の歌であり、八代集においては他に、『金葉集』(二六四・中納言基長)を見出すにとどまる。金葉集歌以外は、いずれも枕詞「なよ竹」で「よ」に付き、また、平安中期の例が目立つ。

「よ」を「はかなし」とする表現は、「ぬるがうちに見るをのみやは夢といはむはかなき世をもうつとは見ず」(古今集・哀傷・八三五・みぶのただみね・あひしれりける人のみまかりける時によめる)、「ふりやめばあとだに見えぬうたかたのきえてはかなきよをたのむかな」(後撰集・恋五・九〇四・よみ人しらず・をとこのつらうなりゆくころ、雨のふりければつかはしける)、「つれづれと思へばうきにおふるあしのはかなき世をばいかがたのみむ」(拾遺集・雑恋・一二四八・よみ人しらず・まうでくる事かたく侍りけるをとこの、たのめわたりければ)と

いった勅撰集歌に、「はかなき世」のかたちで見受けられる。勅撰集歌以外の平安中期までの例としては、「はかなしといふにもいとどなみだのみかかるとこの世をたのみけるかな」(道濟集・四三・ときどきものいひし女のこうみて、そのこなくなりぬとききて)他が挙げられるが、用例としては少ない。

なお、『古今六帖』諸本のうち、寛文九年版本と黒川本が「よをは悲し」と「悲」の字を当てるのは不適であるが、後世の理解の一端を示すものであろう。

四一二四(たかむな)

【本文】 (つらゆき)

うぐひすのしだかむなかにむめのはな散りのこらなん春のかたみに

【校異】 ○散のこらなん―ちりのこしなん(羅)

【語釈】 ○しだかむなかに「しだく」は、踏み荒らす、踏みにじるの意。「筍(たかむな)」を物名として詠み込む。

【通釈】 鶯が踏み荒らす中で、梅の花よ、散り残っておくれ。春の形見として。

【他出】 なし

【考察】

梅の木に分け入った鶯によって散る花に対し、名残惜しい春

の形見として、散り残ってほしいと希求した歌である。題の「たかむな」は、物名として詠み込まれる。

「うぐひす」「しだく」の組み合わせは、「鶯の花ふみしだくこのしたはいたく雪ふる春べなりけり」（貫之集・二〇四・三条右大臣屏風のうた）、「うぐひすのはなふみしだくやまざとは衣手さえぬゆきぞふりける」（六条修理大夫集・一五九）があるが、用例は稀少である。

当該歌の下句「散りのこらなん春のかたみに」と全く同じ下句をもつ歌が『拾遺集』の「わがやどのやへ山吹はひとへだにちりのこらなんはるのかたみに」（春・七二・読人不知・題不知）である。この歌は、『拾遺抄』（春・四九）の他、『和漢朗詠集』（上・春・一四三・兼盛・款冬）にも採録されている。当該歌との関係は未詳であるが、この下句が表現の型となり、少なくとも二首の歌に共通して使用されたことがわかる。

その他、「散りのこらなん」という句をもつ歌としては、「花だにもちりのこらなむすぎぬともをしむにとまるはるかともみむ」（頼基集・二・天曆御時屏風に／三月）、「いろもかもみぎはにやどるやまぶきのおもかげだにもちりのこらなん」（賀茂保憲女集・二七）などがある。当該歌に見える梅のみならず、桜や山吹についていう場合があるが、いずれも惜春の情を詠んでいる。

「春」の「かたみ」は、早くは『寛平御時后宮歌合』に「色ふかくみる野辺だにも常ならば春は行くともかたみならまし」（二〇・右）、「梅がかを袖にうつしてとどめては春はすぐともかたみならまし」（三五・左）、「日くるればかつちる花をあたらしみ春のかたみにつみぞいれつる」（三八・右）の三首の歌が見える（このうち三五番は、後に『古今集』春上、四六番に採録される）。また、「ゆきてみぬ人もしのべと春ののかたみにつめるわかななりけり」（貫之集・三・延喜六年つきなみの屏風八帖がれうのうた四十五首、せじにてこれをたてまつる廿首　ねのびあそぶいへ）という例もある。また、後撰集時代にも、「くれぬべきはるのかたみとおもひつつはなのしづくにぬるることよひを」（能宣集・一一三・ある所に三月ばかりに、花のもとに人人おりぬて侍るほど、雨のすこしそそきはべるほどに、歌などましはべりしに）、「むめのはなをるころもでぞほどふともはるをしのぶるかたみなるべき」（尊経閣本元輔集・六〇・正月、むめ）という歌が見出せる。春の形見とされるのは、当該歌の梅花、前掲拾遺集歌の山吹以外にも、若菜や桜花などがある。

四一四九（むめ）

【本文】

わがやどのむめのそのえに風ふけばにほひはよそになりやしぬ

らん

【校異】○むめのそのへーむめのそのえ(永)そのえ(生イ)(松)梅のそのえ(和・宮・田)そのえ(生歌)(羅)そのえ(林)梅のそのえ(生イ)(黒・寛)

【語釈】○そのえ その枝の意か。諸本「え」に「ふ(生)」の傍書を付すものが多い。「そのふ(生)」は「園生」で、植物を栽培する園。当該歌にあてはめると梅園を指すと解し得る。だが本稿では、諸本本文を尊重し、「そのえ」を採って試解を示す。○よそになりやしぬらん 「よそ」は離れた所、関係のない所、別の場所。「よそになる」で、関係がなくなる、疎遠になるの意。

【通釈】私の家の庭の梅の、その枝に風が吹くと、梅の香りは、私のそばから離れて遠くになってしまうのだろうか。

【他出】なし

【考察】

自宅の庭の梅は自分のものであるが、そこに風が吹くと、その香が遠くに運ばれてしまうことを惜しむ歌である。後世の「梅の花さかぬかさねもにほふかなよその梢に風やふくらん」(玉葉集・春上・七三・権中納言長方・二条院御時、梅花遠薫といへる事)は、当該歌の内容を、梅が香り来る「よそ」の立場から捉え直した歌と見られよう。

「わがやどのむめ」を詠んだ例は、まず『万葉集』に、「我がやどの梅の下枝に遊びつつうぐひす鳴くも散らまく惜しみ」(巻五・八四六・八四二)他の例が見える。一方、勅撰集においては、『古今集』にはなく、初出は『後撰集』である。「さて見べき人もあらしなわがやどの梅のはつ花をりつくしてむ」(春上・二二二・よみ人しらず・題しらず)、「わがやどの梅のはつ花ひるは雪よるは月とも見えまがふかな」(春上・二二六・よみ人しらず・題しらず)の二首の歌がある。

梅の香を風が運ぶという情景は、平安期和歌における梅香を詠む際の類型のひとつであるが、十世紀後半には、「山かぜにまかするよりは梅の花にほひのやどにつきずもあるかな」(元真集・一八・おなじ十二月、春宮女御ふちつほの御つぼねにて、ちちの御五十賀内にせさせたまうしに、その御屏風、障子宣じにたてまつる／むめのはなあるところに人あそぶ)、「はるばるととほきにほひはむめのはななぜにそへてぞたづぬべらなる」(能宣集・二・あるところにくすに、たてまつるとてかさあつめたる、をの宮の太政大臣七十の賀しはべりし屏風和歌春 三首)、「梅がかをたよりの風やつげつらん春めづらしき君がさませる」(兼盛集・一四二・屏風の糸に／女の家にとこきたり、まへに梅の花あり)など、屏風歌にも頻繁に詠まれている。「よそになる」という表現は、「かぎりなきくもるのよそにな

りぬとも人をこころにおくらさむやは」（遍昭集・一九）、「またざりし秋はきぬれどみし人の心はよそになりもゆくかな」（後撰集・恋四・八四）。「なかきがむすめ・心ざしおろかに見えける人につかはしける」、「神かけて君がちかひしわがなかのあふひはよそにならんとや見し」（兼澄集・一三六・わすれ侍りしをんな、四月まつりのひくるまよりあふひをおこせて侍りしかば）などの用例があり、空間的、心理的懸隔をいう。当該歌には、梅香への執着ゆえに生じる心理的距離を読み取るべきであろう。

四一五四（こうばい）

【本文】

うぐひすのすくへる枝ををりたらばこをばいかでかうまんとすらん

【校異】○集付―拾遺物名（黒） ○すくへる―巢くつる（宮）

○うまん―おら（松・羅） おらん（田）

【語釈】○すくへる枝 「巢くう」は（鳥などが）巢を作る意。

○こをばいかでか 「こ」（子）は、ここでは鶯の卵を指す。「いかでか」は反語。どうして……しようか。「紅梅（こうばい）」を物名として詠み込む。「を」と「う」との違いは、近似する音であることによって許容されたのであろう。『古今六帖』諸本文の表記はいずれも「を」である。

【通釈】鶯が巢を作っている枝を折ったならば、どうして鶯は卵を産もうとするだろうか。きつと諦めるに違いない。

【他出】

『拾遺集』巻第七物名、三五四番

紅梅

よみ人しら

うぐひすのすづくる枝を折りつればこうばいかでかうまむとすらん

【考察】

鶯は、作った巢がある枝を折られたら、卵を産むことなどできないうしろという歌である。題の「こうばい」は、物名として詠み込まれる。

単に「梅」といえば、通常「白梅」を指すが、「紅梅」も、平安中期の歌人たちの間で、比較的身近な歌材だったようである。

『貫之集』にはすでに、「紅梅のもとに女どもおりてみる」

（三五八・同じ七年右大臣殿屏風のうた）、「人の家に紅梅あり」

（三七四・天慶二年四月右大将殿御屏風の歌廿首）といった屏風

絵の図柄が見られる。

歌人たちの実際の和歌活動を通して見ると、紅梅は、「前栽に紅梅をうゑて……」（後撰集・春上・一七・藤原兼輔朝臣）、「にしるの宮にちひさき紅梅をうゑさせたまひたりけるを……」（順集・二）というように庭木であり、これを見て、「村上御時御前

の紅梅を女藏人どもによませさせたまひけるにかはりてよめる」(後拾遺集・春上・五四・清原元輔)と、詠歌に及ぶこともあった。また、「兼輔朝臣のねやのまへに紅梅をうゑて侍りけるを三とせばかりのち花さきなどしけるを、女どもその枝ををりて、すのうちよりこれはいかがといひいだして侍りければ」(後撰集・春上・四六・つらゆき)、「はるかむの宰相左近の中將にて、こうばいを折りておこせたりし」(兼輔集・六)、「女の許に紅梅さしてつかはしし」(能宣集・三五六)などは、紅梅の枝が文のやりとりで用いられている。紅梅を詠む歌会も、「あるところにて、あめのうちのこうばいを、をしみて文つくり歌よむに」(元真集・一一八)、「おなじとし、はじめのところのこうばいを殿上人、ところのしゅうなどしてをしむ」(元真集・一一九)、「春の日、客あまた知、不知まできあつまりて酒のみ侍るに、紅梅をもてあそぶとて……」(能宣集・四一二)というように催された。

当該歌は、紅梅を物名として詠む込むが、その類例としては、『宇多院歌合』「紅梅花」題の歌、「あひがたき人をばさらにみしころはいのはなれてはねられざりけり」(七・貫之・左)、「わすれにし人をぞゆめになほこむはいのはなやかにねられてぞみる」(八・右勝)が挙げられよう。

紅梅の枝に付いた鶯の巣を詠んだ例には、「勅なればいともか

しこし鶯のやどはとはばいかがかたへむ」(拾遺集・雑下・五三一・右大将道綱母・内より人の家に侍りける紅梅をほらせ給ひけるに、うぐひすのすくひて侍りければ、家あるじの女まづかくそうせさせ侍りける)、「花の色はあかず見るとも鶯のねぐらの枝に手ななふれそも」(拾遺集・雑春・一〇〇九・一条撰政・天曆御時、大ばん所のまへにうぐひすのすをこうばいの枝につけてたてられたりけるを見て)、「うぐひすのすをくひそむるむめの花いろもにほひもをしくも有るかな」(高光集・一一・こうばいあはせに)といった歌がある。とくに十世紀後半に注目された歌材であるように見受けられる。

「いかでか……とすらん」という言い回しは、「きみにあはでふたよになりぬ玉くしげこよひいかでかあけむとすらん」(古今六帖・第五二七七・二夜へだつ)、「しばしふるよだにかばかりすみうきに哀いかでかあらんとすらむ」(和泉式部続集・四九八)、「こふれどもゆきもかへらぬいにしへにいまはいかにかあはむとすらむ」(相模集・五八八)、「初草のおひゆく末も知らぬ間にいかでか露の消えんとすらむ」(源氏物語・若紫・四六・みたる大人(女房)などがある。用例数は必ずしも多くはないが、平安中期の例が目立つ。

附記

本稿は、同志社大学文化情報学部における二〇一四年度および二〇一五年度春学期の授業「文献講読」において採り上げた内容の一部である。二〇一四年度は、梅山菜帆（四〇九六番）、野口智史（四〇九七番）、二〇一五年度は、國吉匠（四一四九番）、北原優（四一五四番）が、それぞれの担当歌についてレポートを執筆した。その後、これをもとに、「古典籍の保存・継承のための画像・テキストデータベースの構築と日本文化の歴史的研究」（同志社大学人文科学研究所第19期研究会第4研究、および科学研究費助成事業基盤研究（C）課題番号16K00469、二〇一六～二〇一八年度）の一環として、さらに検討を加えた。

用例収集に際し、『新編国歌大観』CD-ROM版Ver.2とともに、竹田正幸氏（九州大学大学院システム情報科学研究院）作成の文字列解析器「e-CSA Ver.2.00」を使用した。

最後に、資料を御提供くださった宮内庁書陵部・肥前島原松平文庫・国文学研究資料館に厚く御礼申し上げます。

『古今和歌六帖』別出歌一覧―第六帖、4092～4154番―

- 4092 ははそ
さほやまのははそのもみちちりぬべみよるさへみよとてらす月影（ならの御かど）
- 4093 1-1古今281、2-3新撰和70、5-22陽成一12、3-3家持232「ちりぬべく」
山しろのいはたのものははそはら見つつや君がひとりこゆらん
- 4094 3-15伊勢集400「みつつやいもが」「いへちゆくらん」、2-1万葉1734「やましなの」「いはたのをの」「やまちこゆらむ」
さほやまのははその色はうすけれど秋はふかくもなりにけるかな（これのり）
- 4095 1-1古今267、3-16是則16、5-22陽成一15、5-266三十人95、5-8定文合16「ははそのもみち」
あきぎりはたたすもあらんさほ山のははそのもみちよそながらみん
- 4096 3-39深養父解3「あしひきの」「やまのにしきは」「むらながらみむ」、1-1古今266「けさはなたちそ」「よそにても見む」、2-2新撰万133「けさはなたちそ」「たつたやま」「よそにてもみむ」
- まゆみ
うつるふもうれしかりけり我がためにふかきまゆみの色をみすれば

- 4107 4106 4105 4104 4103
 ぞ「立ちよるなみや」
 いろのみぞまさるべらなるいその松かげみる水もみどりなり
 けり(つらゆき)
 3-19貫之75
- 4108 4107 4106 4105 4104
 われのみやかげとはたのむしらなみもたえずたちよるきしの
 姫松
 3-19貫之28
- 4109 4108 4107 4106 4105
 はなのいろはちらぬまばかりふるさどにつねには松のみどり
 なりけり
 1-2後撰43、3-19貫之376
- 4110 4109 4108 4107 4106
 世中にひさしき物は雪のうちにもとのいろかへぬまつにぞ有
 りける
 3-19貫之279
- 4111 4110 4109 4108 4107
 おほはらやをしほの山のごまつ原はやこだかかれ千代のかげ
 みる
 1-2後撰1373
- 4112 4111 4110 4109 4108
 うちはへてかげとぞたのむみねの松色どる秋の風にうつるな
 (とものり二首)
 1-2後撰374、3-3家持231、3-11友則20
- 4113 4112 4111 4110 4109
 ふかみどりとときはの松のかけにゐてうつるふ花をよそにこそ
 みれ
 1-2後撰42、3-16是則8、5-267三十六115
- 4114 4113 4112 4111 4110
 春ふかきいろにもあるかなすみのえのそこもみどりにみゆる
 はま松(としゆき)
 1-2後撰111
- 4102 4101 4100 4099 4098
 かへで
 わがやどにもみづるかへでみることにいもをかけつつこひぬ
 日ぞなき
 2-1万葉1627
- 4103 4102 4101 4100 4099
 今さらに心はかへでよはへんといひしことばにあざむかれつ
 つ(そせい)
 <未詳>
- 4104 4103 4102 4101 4100
 よし野山きしのもみちし心あらばまれのみゆきを色かへでま
 て(ただふさ)
 <未詳>
- 4105 4104 4103 4102 4101
 こもち山わがかへるまでもみづまでねんとおもふをいもはい
 かにぞ
 2-1万葉3515
- 4106 4105 4104 4103 4102
 「わかかへるでの」「ねもとわはもふ」「なはあど
 かもふ」
 まつ
- 4107 4106 4105 4104 4103
 いくよへしいその松ぞもむかしよりたちよるなみぞかずはし
 るらん(つらゆき六首)
 1-3拾遺集1169
- 4108 4107 4106 4105 4104
 「いそべの松ぞ」「たちよる浪や」、3-19貫之
 64
- 4109 4108 4107 4106 4105
 「立寄る波や」、2-3新撰和359
- 4110 4109 4108 4107 4106
 「いそべの松
 ぞ」「立寄る波や」、2-3新撰和359

- 4111 たれをかも知る人にせんたかさこのまつも昔の友ならなくに
(おきかぜ)
1-1 古今 909、2-3 新撰和 205、2-6 和漢朗 740、3-10 興風
52、5-1 266 三十人 78、5-1 267 三十六 108
わがせこがつかひこんかといでたちしこの松が枝をけふかす
ぎなん
- 4112 2-1 万葉 1678 「いでたちの」「このまつばらを」
風ふけばなみこすいそのそなれまつ根にあらはれてなきぬべ
らなり(人丸)
- 4113 1-1 古今 671 「浪打つ岸の」「松なれや」、3-1 人丸 185 「なみ
たつきしの」「松なれや」
- 4114 かへ
いろかへぬかへのはのみぞあきなれどもみぢすることならば
ざりける(貫之)
- 4115 7-7 貫之 76、3-1 9 貫之 710 「秋くれど」
松かへるときはににべきこころかはみだれてこひんあやなか
りけり
(未詳)
- 4116 たけ
我がやどのいささむら竹ふく風におとのさやけき此ゆふべか
な(やかもち)
2-1 万葉 4315 「ふくかぜの」「おとのかそけき」「このゆふへか
も」
- 4117 千よもたる竹のおひたるやどなれば千くさの物はものならな
くに(つらゆき)
- 4118 3-1 9 貫之 350 「千種の花は」
みよし野の山より雪はふりくれどいつともわかぬわがやどの
竹(おなじ)
- 4119 3-1 9 貫之 59 「ふりくれば」「いつともわかず」
- 4120 3-1 9 貫之 277 「竹のみぞ」
今さらになにおひいづらん竹のねのうきふししげきよとはし
らずや(みつね)
- 4121 1-1 古今 957 「竹のこの」、7-5 躬恒 301 「何おひづらむ」「竹
のこの」「よとはしるしる」
うきふしもあらじとぞおもふなよ竹のよをはかなしと思ひに
しかは
(未詳)
- 4122 しぐれするおとはすれどもなよたけのなどよとともに色もか
はらぬ(そせい)
- 4123 2-1 6 和漢朗 434 「しぐれふる」「くれたけの」、3-1 14 兼輔 52 「し
ぐれふる」「くれ竹の」
たかむな
竹のはにふりかからなん梅のはな雪のうちのをほるとみるべ
く(伊勢)
3-1 15 伊勢集 63 「ちりかからなむ」「雪のなかのも」「はるとみ

- 4130 うぐひすのしだかむなかにむめのはな散りのこらなん春のか
たみに(つらゆき)
〈未詳〉
- 4129 ゆべく」
- 4128 袖たれていざ我がやどへ鶯のこづたひちらすむめのはな見に
2-1万葉 4301 「いざわがそのに」、1-3拾遺抄17「いざわがそ
のに」、1-3拾遺集28「いざわがそのに」「梅の花見む」、5-
264和十種43「いざわがそのに」「むめの花みへ」
4126 なほざりに思ひつるものをむめのはなこきかにわれやこととし
みなん(閑院太政大臣)
1-2後撰16「折りつるものを」「衣そめてむ」
4127 鶯のかさにぬふてふむめのはなをりてかざさんおいかくるやと
(東三条右大臣)
1-1古今36
4128 くとあくどめかれぬものを梅の花いつの人間にうつろひにけ
ん(つらゆき)
1-1古今45「うつろひぬらむ」
4129 ことしよりはるしり初むるむめのはなちるてふことはならはざ
らなん(おなじ人)
1-1古今49「さくら花」、2-3新撰和37「さくら花」
4130 むめのはなさきぬるときはくらぶ山やみにこゆれどしるくぞ有
りける
1-1古今39「にほふ春べは」、2-3新撰和9「にほふはるべ
は」
- 4131 むめのはなさくとしらずやみよし野のやまに友まつ雪のふるら
ん
- 4132 3-19貫之60「咲くともしらず」「雪のみゆらん」
梅のかのかぎりなければをる人のてにも袖にもちりにけるかな
4133 3-19貫之206「しみにけるかな」
わがやどにありといひながらむめのはなあはれと思ふにあくと
きもなし(つらゆき)
- 4134 3-19貫之219「ありと見ながら」
むめが枝にふりかかりてぞしら雪もはなのたよりにをらるべら
なる(おなじ)
- 4135 3-19貫之67「白雪の」、1-3拾遺抄10、1-3拾遺集13「白
雪の」
かぞふればおぼつかなきをわがやどのむめこそはるのしるべな
りけれ(おなじ)
- 4136 3-19貫之56「かずはしるらめ」、1-3拾遺集1012「かぞふれど」
「かずをしるらめ」
春の夜のやみはあやなしむめのはな色こそみえねかやはかくる
る(みつね)
- 4137 1-1古今41、2-3新撰和21、7-5躬恒14、7-5躬恒261、
2-5金玉6、2-6和漢朗28
いづれをかわきてをらましむめのはなえだもとををにふれる白
雪(おなじ)
- 4138 3-12躬恒371「えだもたわわに」、7-5躬恒22「枝もたわわに」
ふる雪にいろもまがひぬ梅のはなかにこそにたる物なかりけれ

- 4144 3 よそにのみあはれとぞみし梅のはなあかぬ色かはをりてなりけ
- 4143 1-1 古今47、2-2 新撰万3、3-9 素性3、5-4 寛平后
まれる (おなじ)
- 4142 (そせい)
梅のはなをればこぼれぬ我が袖ににほふかうつせ家づとにせん
「みるとも見えし」
- 4141 1-1 古今40、7-5 躬恒260 「みれどもみえず」、3-12 躬恒360
ける (おなじ)
- 4140 7-5 躬恒53 「よろづかへりの」「春にあはんとて」
むめのはなさきにけらしなことしよりよろづよふべきはるにあ
はんと (おなじ)
- 4139 (おなじ)
かをとめてたれをらざらん梅のはなあやなしかすみ立ちなかく
しそ (おなじ)
5-1 267 三十六22、3-12 躬恒303、7-5 躬恒132、1-1 3 拾遺集
16、1-1 3 拾遺抄15、2-1 6 和漢朗95、5-1 266 三十人22、5-1
268 深窓秘7

- 4151 3 こうばい
雪とのみあやまたれしを梅のはなくれなるにさへかよひけるか
- 4150 2-1 1 万葉1441 「かすがのさとの」「やまのあらしに」、7-5 麗
花集13 「かすがのさとの」「山おろしふく」「ちりやしぬらむ」
- 4149 (未詳)
わがやどのむめのそのえに風ふけばにほひはよそになりやしぬ
らん
- 4148 1-1 1 古今38、3-11 友則3、3-1 25 信明100、2-1 6 和漢朗100
みつしかとこのよあけなんうぐひすのこづたひちらす梅のはな
みん
- 4147 3-1 15 伊勢集92 「みにこざりせば」
君ならでたれにかみせんむめのはないろをもかをも知る人ぞし
る (とものり)
- 4146 2-1 1 万葉1660 「うめのはなうかべ」
おもひいでてみちこざりせば梅の花たれににほひのかをうつさ
まし (伊勢)
- 4145 1-1 1 古今37、3-9 素性2
さかづきにむめのはなうけおもふどちのみての後はちりぬとも
よし (やかもち)

- 4154
うぐひすのすくへる枝ををりたらばこをばいかでかうまんとす
らん
〔未詳〕 1-3 拾遺集 354 「すづくる枝を」 「折りつれば」
- 4153
くれなるに色をばかへて梅のはなかざことごとにはほざりけ
る (つらゆき)
1-2 後撰 44、3-19 貫之 374、7-5 躬恒 258
- 4152
くれなると雪とはとほき色なれどむめのはなにはなほかよひけ
り
3-19 貫之 358 「あやまたれつつ」
3-19 貫之 469
- な